



第73回 コロナ禍とカミュのペスト

▼新型コロナ感染と緊急事態宣言

ゴールデンウィークである。お天気もよく、本来なら多くの人が観光地に出向く時期だが、新型コロナ感染で緊急事態宣言が出て、不要不急の移動を控えるようにというお達しである。県知事からは「お・でんウィーク(家におる、出ん)」とのこと。観光地は閑散としている。コロナ禍は感染による死亡リスクだけでなく、人の移動制限や勤務の変化により、とくに観光業、航空・JR・バス・タクシー、中小の小売店など、幅広い業種に大きな打撃を与えている。いずれ有効なワクチンや抗ウイルス薬が発見され収束に向かうと思うが、それまでは3密を避け、不要不急の外出を控えるという地道な対応を続けるしかない。要するに、自宅にいる時間が長くなるということである。

▼コロナ対策に伴う影の部分

100年前のスペイン風邪を思わせる、この世界的感染症に対峙するには、人から人への伝播を防ぐのが一番大切である。感染症の爆発を防ぐこと、重症者の治療を遅らせないこと、軽症者は自宅やホテルに隔離すること、いずれも適切な対応である。しかし、自宅にいる時間が長くなり、職場での接触が限定され、一人でいる時間が延びることは、健康の上で別の問題をはらんでいる。とくに子供と高齢者は深刻である。自宅で誰とも会えずじっと動かない生活は、たいへんなストレスとなる。そして高齢者はそもそも、SNSでのコミュニケーションが苦手である。地域の小さなコミュニティで集まってよもやま話をする、そういう何気ない風景が消えてしまった。そのような生活は、深い孤立と分断を生み、コロナ対策の影の部分ともいふべき健康問題につながっていくだろう。

▼カミュの「ペスト」に学ぶ

第二次世界大戦直後のパリで、カミュは「ペスト」を発表した。アルジェリアのオラン市で突如ペストが発生、市はロックダウンされ外界と突然隔離される。そのなかで、医師リウー、保健隊タルー、神父パヌルーなど、それぞれが信念をかけてペストという不条理に向き合う物語だ。ペストで多くの人が死んでいく日常のなか、町の人々は徐々に「絶望」に慣れ享楽を求める。しかし、主人公リウーは医師としてペスト患者に誠実に向き合い続ける。タルーは先の見えないペストに抵抗を続けながら、「ペストとは何かを理解したいんだ」とつぶやく。コロナ感染症におびえる現在の状況に、多くのメタファーを与えてくれる小説だ。不条理に抵抗し続けること、それこそが人間の証だとカミュは語るのだが、さて私たち自身はどうだろうか。この危機的な状況のなかで、何を考えてどう行動するのか、半世紀の時を超えてカミュが語りかけてくる。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)